

28PA-pm249S

訪日外国人観光客の薬局に関する意識調査及び日本での薬局利用の実態

○吉田 舞衣¹, 安藤 大河¹, 坂東 実佳¹, 東垂水 郁圭¹, 村重 勇輔¹, 山川 恵里佳¹, 山本 淳彦¹, スミス 朋子¹, 楠瀬 健昭¹ (大阪薬大)

【目的】2016年度の訪日外国人数は2400万人を超え2020年の東京オリンピックを控えた今、増加の一途を辿る外国人観光客に対する医療提供サービスの整備は必要不可欠であると考えます。本調査では外国人観光客の薬局に関する意識調査と日本における薬局利用の実態を調査することにより、薬局・ドラッグストアを主とした日本の医療提供サービスに対するニーズと外国人が直面する問題を抽出することを目的とした。

【方法】主として、2017年10月21日に大阪薬科大学薬学部4年次生の学生が中心となり、京都駅前周辺歩道にて滞在期間が3ヶ月未満の訪日外国人観光客を対象とし国籍を限定せず、英語、日本語、その他言語にてランダムにアンケートを行った。グーグルフォームで作成したアンケートをタブレット端末、もしくは紙のアンケート用紙を用いて調査員の学生が適宜補助を行いながら聞き込みを行った。

【結果および考察】有効回答(n=78)のうち、半数以上の外国人観光客が滞在中に医薬品や医薬部外品の購入の為に日本の薬局を利用しているという結果が得られた。日本の薬局の印象に対する回答は清潔さ、スタッフの親切な対応、アクセスの良さが利点として高い割合を占めているのに対し、欠点として医薬品の包装や店内外の表示の殆どが日本語表記であるという意見が多くみられた。また、自国での薬局利用頻度が多い回答者は旅行中の初期医療の第一選択として薬局に行く、あるいは、セルフメディケーションを行うという回答を選ぶ割合が高いことが示唆された。今回の調査を通して日本の薬局・ドラッグストアが評価されている一方で、外国人観光客が薬局で直面する問題点として、日本語のみを使用した情報提供方法による医療提供サービスへのアクセス制限が示唆された。